京都広告協会70周年記念事業
これからの30年 メッセージ募集

優秀賞

古井菜月 「三十年後の送り火」

二〇五六年、八月十六日、午後八時。京都の街から灯りが消えていく。街じゅうの人が、同じ山を見上げる。如意ヶ嶽に「大」の字が燃え上がる。

五山送り火は、お盆に帰ってきたご先祖を、あの世へ送り届ける火だ。これほどの規模で街ぐるみで死者を送る行事は、世界でこの街にしかない。護摩木に願いを書き、火が消えれば静かに手を合わせる。あの火は、京都が千年繰り返してきた「別れの作法」だ。停滞、少子高齢化、先の見えない世情。課題を数え上げれば、この街の未来は暗く語られがちだ。けれど私は、子どもの頃、鴨川の橋の上から祖母と見た送り火を忘れられない。点火の瞬間、あれほどのざわめきが、ふっと消えた。祖母は手を合わせ、それから顔を上げて笑った。あの夜ほど、この街を信じられる夜はない。送り火は、過去を懐かしむ火ではないからだ。送るとは、前を向くことだ。千年守られてきたのは山の字形ではなく、「終わりを丁寧に扱う者だけが、始まりを丁寧に始められる」という思想のほうだと思う。

だから、これからの三十年に必要な「行動のシフト」も、ここから始まる。悔やむ手を、合わせる手へ。数え上げる口を、願いを書く手へ。松割木を担ぎ上げるのは、保存会の孫の世代と、この街を選んで移り住んだ新しい隣人たちだ。担い手が減るなら、送り火のように分け隔てなく輪に迎えればいい。

失われた三十年、という言葉がある。けれど京都は知っている。失うことと、送ることは違う。過ぎた歳月をきちんと火にくべて、手を合わせ、それから顔を上げる。

点火の夜に灯りを落とす店や宿は、すでに増え始めている。まずは次の八月十六日、家の灯りをひとつ消して、山を見る。行動のシフトは、そのスイッチひとつから始まる。

その積み重ねの先、言葉で街を灯してきた人たちが、百年目を数える夏。京都はほんとうに、一斉に灯りを消しているだろう。街が暗くなるのは、次の朝を、千年先を、明るくするためだ。